

## 障害者支援施設・地域生活支援センター（②, ④, ⑤, ⑦）

コロナの感染が見られ始めた令和2年3月から毎週又は2週間に1回程度、**産業医を含むコロナ対策会議の定期的な開催**を行い、それぞれの事業所の**感染状況**において利用する**子どもや家族、職員の状況等を報告し合った**。また、マスク、アルコール、エプロンなど備蓄品が品薄なときは、代用品の提案や**各事業所からの備品・在庫状況の報告・共有**を行っていた。感染が小康状態になった際も継続して月に1~2回会議を開催し、**産業医によるアドバイスなどのバックアップ**も受けながら現在も継続している。コロナ対策会議でマニュアルを作成し、**時期に応じた感染フェーズ段階を設定し、感染拡大地域を確認した上で利用の自粛等決定事項を文書やグループウェアで職員と利用者に周知し、それに沿って対応**していた。

職員への心配ごとに対しては、福利厚生の一環として加入している保険の相談窓口の紹介や、産業医の紹介など、看護師から数回アナウンスを行い**施設外を含む複数の相談窓口を設定**していた。もともと**理事長や施設長との職員個別面談**が行われており、コロナ禍になってからは、この個別面談のなかでも生活の変化や困りごとを尋ねるような機会をもっていた。若い職員が多く、思うように外出や外食もできないため**若い職員に対して、グループリーダーが目をかけ、声をかける**などの配慮がされていた。

入所系が成人・児童・グループホームとあり、「施設で暮らしている人たちは何があっても私たちが守る、そのためには職員の心も体も元気でないと…」という**理事長の強いリーダーシップ**のもと、**なんでもかんでもの規制ではなく、「コロナを正しく恐れる」ことを伝え**続けていた。

例えば、児童入所施設の子どもたちが毎月楽しみにしていた外食に関して、3密対策をとっているレストランを下見したり、個室を見つけたりして、出かけることができるための対策を行った。また、温泉旅行に行く予定だった代わりに、新しい家族湯を開拓したりして、**規模を小さくしながらも今までのイベントを継続・実施し、「コロナ禍でもできること探し」**をしながら、子どもたちや利用者の楽しみが減らないように、めりはりのある楽しい生活になるようサポートをしていた。

また、職員は**感染への不安を抱えながらも、療育の観点で重要な取り組み**も行った。

子どもとの距離が近くなる食事支援では感染リスクが高くなるが、保護者の希望もあり食席の間隔をあけ換気をするなどの対策を取り食事支援を継続している。**療育上必要だと思われる職員の「顔の表情」を見せたいときには、ある程度距離をとってマスクをはずして口の動きをみせている**。入所の子どもたちは月に2回ぐらい買い物や外食により地域の人との交流やマナーを身につける機会にしているが、今は行くことができない。そのため、ドライブスルーやテイクアウトを利用するなど、なるべく**子どもが窮屈な感じを受けないように工夫**をしたり、登下校時に近隣の方々に積極的に挨拶を行うなど地域とのかかわりが継続できるよう取り組んでいる。